

---

立命館大学

3月入試対策講座

現代文

河合塾 現代文科講師

青木 健太

# 立命館大学

立命館大学の後期分割方式の国語の問題は、現代文二題の構成である点は他の日程と同じですが、古文が出題されない点が異なります。また他の日程では大問一が長めの文章、大問二が短めの文章と分けられているのがふつうですが、後期分割方式は四〇〇〇字程度の文章が二題出題される点も異なります。もちろん、全体で見た場合の設問数も多くなっています。字数としては共通テストと変わりませんが、出題される文章は共通テストよりも難しいと考えておいた方がよいでしょう。設問の種類が豊富である点は他の日程と同じです。各設問に対する適切な解法を把握しておきましょう。試験時間は八〇分あります。評論文を二本読むハードな試験ですが、しっかり作戦を立てた上で臨めば大丈夫です。すでにいくつか入試を経験しているのではないかと思います。ここは一度冷静になり、今の皆さんの力を十分に発揮できるように体勢を整えましょう。

## ○本文読解

問題文は評論文が採用されています。設問数が多いことに伴って、傍線や空欄がそこかしこにあります。これらに気を取られてしまうと視野が狭くなり、文章全体のつながりを見失うおそれがあります。こうなると、読解がうまくいけなくなり、結果として設問の解答に支障をきたします。とくに対比構造をもつ文章が出題された場合は、その見極めに失敗すると取り返しがつかなくなります。文章読解の際は文や段落のつながりを読み取ることに集中し、少なくとも文章としての切れ目（話題の転換点）が見られるまでは読み続けましょう。

後期分割方式で採用されている評論文は、多くの受験生にとって読解が難しいと感じられるものになっていると思います。概念語が多用された抽象的な議論を展開しているものが出題されると考えておきましょう。評論文の読解は、論理構造の理解に基づいて筆者の主張の内容を理解するという二層構造になっています。評論文を読んでいる「何を言っているかわからない」となる場合は、内容理解の方で支障が出ていることがほとんどです。この場合でも論理的な構造の把握は続けられるということが重要です。対比構造を代表として、細かいところでは文の主述関係、長めの文脈では因果関係のつながりなど、語と語、文と文、段落と段落の関係の整理に集中しましょう。その上で、筆者が具体例を出したところで内容理解を試みるとよいでしょう。もちろん、把握した文章構造に基づいて設問にアプローチすることもできます。この考え方もっておけば、難しい文章でも立ち止まることがなく読み進めることができます。

評論文を読む際につけるとよいことをチェックリスト形式でまとめておきました。すでに確立した読解方法をもっている方も、一度目を通してもらえば自分の読解方法を整え直すことができます。

評論文読解のチェックリスト

・文章のつながりを確認する

□ 指示語や接続語を見て文と文の関係や段落と段落の関係を把握。

□ 新しい段落を読み始めるときは話題転換の有無を確認。

↓とくに言葉遣いの変化に注目する。

□ 筆者が文章全体を通して説明しようとしているもの（＝主題）を意識する。

・対比構造の見極め

□ 対比構造に特有の表現の有無を確認。

□ 対義語の有無を確認。

□ 筆者以外の論者が文章中で言及されているか否かの確認。

## ○設問ごとの対処法

各設問について考える際はその問題にふさわしい解法をあてはめて対応しましょう。立命館大学の場合は設問の種類が豊富ですから、各設問への適切な応じ方を知っておくことは精度の面でも効率の面でも大切です。種類が多いので得手不得手が出てくることもあるでしょう。どのような形式の設問が自分の弱点になっているか確かめ、重点的に対策しておきましょう。

以降で種類ごとに具体的な解法を説明してきます。それぞれの解説が二〇二五年度過去問のどの種類の設問に対応しているか【 】で示してあるので、手元に過去問を用意して実際の問題を見ながら確認してください。

### 1. 全体について

各設問の詳細な対応方法について触れる前に、まずは設問の解答全体に関わることを確認しておきましょう。

#### 1・a. 設問の解答タイミング

設問をどのタイミングで解けばいいか。同じ問題を解くにしても「自分の力の適切な使い方とは？」という考え方があり、「設問を解くタイミング」というのはそこに関わる問題です。その問題を解く力をもっているも、使いつ方を誤れば結果は出ない。逆に言えば、どこで何をするかをしっかりと考えれば、良い結果を得られることである。本番で自分の力を最大限発揮できるように、解き方の方針を定めておくことが大切です。

現代文の問題を解く場合の手順は、大別すると次の二つがあると思います。

- ①文章を全部読んでから設問を解く
- ②文章読解と設問の解答を同時並行で進める（＝読みながら解く）

どちらの方が良いか相談を受けることがよくありますが、この二つはどちらにもメリットとデメリットがあるので、どちらの方が優れているというところは一概には言えません（ただし、設問によっては最適な解答タイミングが決まっているものもある）。得手不得手の問題で、①が合う人もいれば②が合う人もいます。最終的な判断としては、「自分が最も安定して高得点を狙える解き方」を採用するのが正しい。ここでは①と②の特徴をまとめておきます。二つの解き方のうちこれと決めたものがあるなら、一番慣れている方法を使った方がよい結果が得られると思います。ここで説明していることを見て自分の解法のデメリットを知っておいてもらおうと良いでしょう。

#### ▼①の場合

メリット…設問の解答根拠となる内容を全部見た状態で解ける

①の最大のメリットは、設問を考える際の最も理想的な状態をつくることことができる、という点にあります。全文を見渡しているために確実な根拠をもって解答できるので、高い精度を出しやすい解き方と言えます。

デメリット…時間がかかりやすい

①の方法では先に本文全体を読んでいるため、設問を考える際にもう一度該当する文脈を読み直す必要が出てきます。つまり、文章を読み返す回数が増えやすく、結果として時間を食いやすい。もちろん、文章読解で手間取れば、設問に解答するための時間を圧迫してしまう恐れもあります。このように、①の場合は時間がかかりやすいというデメリットをいかにケアできるかがカギとなります。

デメリットのフォロー

キーワードになつていそうな言葉や、筆者の強調がある文を見つけた場合は、積極的に線を引いたり○で囲んだりするとよいでしょう（キーワードなどは本文の上下に書き出しておくというのもあり）。仮に問題に関わらない場所に印をつけていたとしても、印をつけたところは周辺も含めて頭に残りやすいので、そこをきっかけに設問の対応箇所を見つけられることがあります。

▼②の場合

メリット・効率が良い（時間の消費が少ない）

②の方法では読んだ記憶も新しい状態で問題を解くことができるので、文章を見直す回数を抑えやすく、選択肢の正否にも反応しやすい。効率性を考えると、②の方法に利があります。

デメリット・情報不足のまま設問にぶつかる

②は全文を読んでいないので、設問を解く際に必要な情報がすべて出そろっているとは限りません。現代文の勉強をしていて気づいていると思いますが、解答根拠はいつも傍線部の近くにある、とは限りません。問題文の前の方に出てくる傍線部の解答根拠が文章後半にある、というようなパターンもそう珍しくはないものです。根拠不足の状態の問題を解こうとすると、正確な判断ができず時間も無駄にかかります。このパターンの設問にどう対応するかが②の方法を使う際の注意点です。

デメリットのフォロー

・設問で提示されている条件に注目する

設問文から解答条件を割り出せば、今読んでいるところまででその設問を解けるかどうか判断できます。最適なタイミングで設問に答えることができるようになるので、②の方法のメリットを生かしやすくなるでしょう。

・無理をしない

設問を考え始めて判断不可能な要素が出てきたら、すぐに解答を中断して読解に戻しましょう。問題を飛ばすことに抵抗を感じるかもしれませんが、設問はもともと順番通りに解けるとは限りません（問題作成者としても「設問番号＝解答の順番」とは考えていないかもしれない）。解ける問題から進めていくというのは、戦略的判断として有意義なものです。

1・b. 全種類の設問に共通の考え方

空欄補充や脱文挿入など、様々な形式の問題がありますが、いずれにしても複数の選択肢の中から正解を選ぶ解答方法になっています。選択問題では基本的に左記の様な3つの手順を通して解答を確定します。

①問われていることを把握する。

②本文のどこに根拠があるかを示して正しい選択肢を選ぶ。

③本文のどこに根拠があるかを示して誤りを含む選択肢を排除する。

この3つをすべてクリアできている状態が理想ですが、実際の試験では時間が限られていますから③の手順はカットした方がよい場合もあるでしょう。ただし、①の手順は精度に大きく関わる手順なので、どの問題でも必須だと考えてください。

いずれの種類の設問でも、選択問題を解く際に覚えておいてもらいたいのは、正解選択肢がわからないときにどうするか、ということ です。読解がうまくいってれば選択肢吟味もスムーズに進む、とは限りません。設問は設問で正解が導き出しにくくなるような「壁」が作られていることもあるからです。逆に言えば、ぱっと見で

正解がわからなくても焦る必要はありません。もし、正解が見えないと感じたら、その時は間違い選択肢を排除することを優先しましょう。正解選択肢が見えていないのにそれでも正解を無理やり見つけようとすると、時間のロスが大きくなるばかりで吟味が進まない。こういった問題は、間違い選択肢を切っていくことで解答を進められます。いわゆる消去法という考え方です。読解ができていながら間違い選択肢を見抜くことは可能なので、最終的にはきちんと根拠に基づいた判断で正解選択肢を導き出すことができます。

## 2. 傍線部の内容について尋ねる問題【大問一問4など】

最も数の多い形式になっているのは傍線部の内容について尋ねる問題です。オーソドックスな現代文の問題なので、これについてはすでに自分なりの解法をもっている人も多いでしょう。ただ、立命館大学のこの形式の問題は選択肢吟味が難しいことが多く、形式としてはシンプルでも油断なりません。ぜひ今一度基本的なところから確認しておいてください。

### 2・a. 傍線部の尋ね方には二つの種類がある

傍線を引いて本文の内容について尋ねる問題には、大きく分けて二つの種類があります。それぞれ解答条件が異なっており、これを把握しておくだけでも選択肢吟味が進めやすくなります。とくに後述の「二択で迷う状態」を突破する際に重要になります。

まず、傍線が引かれている部分の説明を考える問題。わかりやすいものでいうと【大問一問10】のようなパターンです。「説明」というのは「別の言葉で言い換えること」なので、この問いは「傍線部の言い換えになっていること」が正答の基本条件になります。傍線部に含まれている要素を分析し、それらに本文ではどのような言葉が結びつけられているかを調べましょう。

もう一つは、傍線が引かれている部分がなぜ言えるのか、その理由を答える問題。【大問一問4】はこのパターンです。傍線部を結論や結果と考えた場合、その手前にどのような話がどのような順序で並んでいるかを整理すれば解答が見えてきます。評論文の場合、傍線部は主に筆者の主張に相当する内容をもつことが多いです（ただし、複数の論者が出てくる文章の場合は筆者以外の誰かの主張であることも考えられるので注意しましょう）。その理由を示すことが求められているので、傍線部を一つの結論と捉え、筆者の主張がどのような論理でそこにたどりついているかを明らかにすればよいわけです。もっと簡単に言えば、傍線部を最後として、その手前にどのような話がどのような順番で並んでいるかを整理すればいいということです。筆者は自分の主張とその根拠を読者に伝えることを目的として文章を書いているので、評論文は全体として結論に向けた一つながりの因果関係をもっています。理由について尋ねる設問はその一部かあるいは全体を尋ねていると考えられます。因果関係について述べる場合は基本的に原因について記述が先行するので、傍線部の手前をまずは見るとよいでしょう。ただ、傍線部が話題転換の直後の文に引かれている場合など、傍線部の後ろに理由が置かれているケースもあるので、機械的に傍線部の手前だけ見て判断することがないように気をつけてください。

### 2・b. 選択肢吟味の仕方

選択形式の問題を解く際に必ずぶつかるのが「最後の二択で迷う」という状況です。誰もが「もう一個の方を選んでいたら合っていたのに！」という悔しい思いをしたことがあるでしょう。この問題をクリアするためには、ややこしい選択肢の特徴を理解しておくことがカギになります。選択問題では「正解に対する対抗馬」という位置づけで、意図的に正解をわかりにくくするための「罠」となる選択肢が仕掛けられます。この「対抗馬」選択肢の作られ方にはおおよそ次のような二パターンがあります。

- ① 正解の選択肢とほぼ同様の内容をもつが、一部が異なる。  
② 本文の内容に合致する説明を含むが、正答条件を満たしていない。

それぞれ傍線部が誤答とされるポイントになっています。これらを攻略するための方法を確認しておきましょう。

▼①の場合

①のタイプの選択肢に遭遇した場合は、「とてもよく似た内容をもつ選択肢が二つ残る」という状況になります。この状況になったときには「本文と見比べて正否を判断する」という方法がいったん通用しなくなります。①の場合の「間違い選択肢」は、「正しい選択肢」が言及しているのと同じ文章中の箇所と言及するつくりになっています。そのため、本文を参照すると「間違い選択肢」まで正しいように見えてしまうというわけです。

ここでもう一度①のつくり注目しましょう。①における「間違い選択肢」の間違いポイントは、「正解の選択肢と一部だけ異なる」というところにあります。ということは、①において確実に最後の二択を乗り越えるためには、「一部だけ異なる」箇所を明確にする必要がある。つまり、残った二つの選択肢をよく見比べ、異なっている部分を見つければよいのです。例えば、主語に違いはないか、片方にはあるのにもう一方にはない言葉などがないか、といった点を確認してみましょう。ごくわずかでも何らかの違いがあるはずです。そして、違いが見つかったところで文章を確認しましょう。見つかった違いを基準にして文章との対応をもう一度取り直せば、今度は選択肢の正否がきちんと見えるようになっていきます。

▼②の場合

②はかなり難しいタイプの問題です。②の「間違い選択肢」がもつややこしさの原因は、「本文との内容合致の点だけでいえば正しい説明といえる」というつくりになっていることにあります。②の場合、間違いであると判断できる根拠が「本文に対応する記述がない」や「本文に書いてあることと矛盾する」ではありません。つまり、単純に「選択肢の内容が本文に書いてあるかどうか」を基準に考えると、「書いてある」という判断になってしまふということです。ここで重要なのが、現代文ではどのような問題であっても設問文によって正答の条件が定められている、ということなのです。たとえば、「傍線部と同じことを比喩的に表現している箇所を抜き出せ」という問題があったとしましょう。この場合、正答の条件は、「傍線部と同じ意味になること」、「比喩的な表現が用いられていること」の二つある。この二つを満たしている箇所が正解です。②ではこのような正答条件が選択肢吟味の基準となります。先に示した②の 패턴の「正答条件を満たしていない」というのは、すなわち、「内容的には本文に対応するが、設問が定めた正答条件を満たす要素を含まない」ということです。②の「間違い選択肢」はこのような基準で誤りと判断されるのです。

以上のことからわかるように、②を乗り越えるために必要なのは、「設問文をよく読み正答条件を把握すること」です。傍線部やその前後の文脈も含めて設問が尋ねている事柄の全体を捉え、要求されている答えの条件が何かを明らかにする。これができれば、②のタイプの選択肢吟味も攻略可能です。

実は②の 패턴が生じやすい問題があります。「2・a. 傍線部の尋ね方には二つの種類がある」で言及した**傍線部の理由を尋ねる問題**です。この尋ね方をしている問題の場合、選択肢に対応する記述が本文で確認できても、傍線部の理由にならなければ正解とはなりません。理由を尋ねる問題については、あらかじめここで紹介した②の pattern がある可能性を考えておくといよいでしょう。

2・c. 内容合致【大問一・二問12】

文章全体を対象として、選択肢の記述が文章と合致するものであるか否かを判断する問題。内容合致の選択肢の作り方は実は大学の特徴が出る所の一つです。この問題の場合、選択肢のつくりが難易度を左右します。文章中の記述をほとんどそのまま流用しているような選択肢になっていれば易しくなる。逆に、文章中の記述を大き

く言い換えている場合は難しい。とくに注意したいのは言い換えが多用される要約型の選択肢が含まれているパターンです。立命館大学の問題ではこのタイプの選択肢が正解になっていることを想定して臨みましょう。ポイントに文章中の特定箇所而言及するのではなく、数段落に渡る内容をまとめたような選択肢が要約型です。このようなつくりをもつ選択肢は、表面的な文言については文章中に直接対応する箇所があるわけではないので、一見すると文章内容から大きく外れているように見えます。筆者の主張や意図を読み込んだ読解ができていけば正解を見抜くことができます。ただ、要約型のものが正しい選択肢になっている内容合致問題はやはり手強い部類に入ります。これについては「1. 全種類共通の考え方」で言及した消去法を使うことも考えておくべきでしょう。

### 3. 空欄補充

文章中に空けられた空欄に適切な言葉を入れる問題。空欄前後の内容がヒントになっており、そこから空欄の中に入っている言葉の意味を推測します。難しい問題では、空欄の前後の内容を理解するためにさらに他の文脈の理解が必要になるなど、文章を広く見て考える必要があります。視野が空欄前後に狭められてしまいやすいことと相まって、手こずってしまう問題になっていることがあります。空欄補充は選択肢の候補によって、だいたい三種類に分けられます。それぞれについて対応方法を確認しておきましょう。

#### 3・a. 接続語【大問一問3／大問二問3】

「しかし」や「なぜなら」などの言葉が選択肢に並ぶパターン。接続語には文のつながり方を示す記号としての役割があります。空欄前後の内容を確認し、どのようなつながりになっているかを読み取りましょう。意外と盲点かもしれません。接続語の意味はちゃんと例文つきで辞書に載っています。理解のあやしいものがあるなら調べておきましょう。接続語の空欄補充は確実に決まるものから埋めていくのが定石です。というのも、前後の關係に特徴が出ていくものもあるからです。わかるものから埋めていって、残ったものを残った空欄に入れる、という手順で解いていきましょう。立命館大学の後期分割方式の場合は組み合わせで選ぶ形式が採用されているので、全ての空欄を埋めなくても選択肢が選べる可能性があります。わかりやすいものから考えるという方法がとくに有効だと言えます。

#### 3・b. 副詞・指示語【大問一問3・大問二問3】

「もちろん」や「もし」などの言葉が選択肢に並ぶパターン。文の一部が呼応して特定の表現になっていることが多く、そこをヒントに判断することになります(例:「もしくならば」)。選択肢に接続語と副詞が混在するパターンもあります。わかるものから入れていけば良いという解法は変わりません。

#### 3・c. 短文や語句【大問一問2・7・9／大問二問5・10】

短い文や語句が選択肢に並ぶパターン。二字熟語、四字熟語、慣用表現などが並ぶこともあります。四字熟語や慣用表現は純粋に語彙力が問われることが多く、空欄の前後で答えが決まりやすい傾向があります。逆に、二字熟語など評論文で頻出の言葉(「観念」とか「捨象」など。「〇〇性」や「□□的」のようなものもよく見られる)が候補となる場合は空欄前後で答えが決まらず、より広い文脈での論理的読解が必要になる傾向があります。短文の場合も同様で、文章を広く見る必要があると考えましょう。

### 4. 脱文挿入・文整序【大問二問6】

文章の中から取り出された一文を適切な箇所に戻す問題。挿入すべき文の内容をよく見て、前後にどのような

文が存在しているはずか明らかにし、それを基準に候補となっている箇所を検討しましょう。この問題は本文全体の理解が必要になることが多いので、少なくとも本文全体を読んでから解答するようにしましょう。基準を決めずにいきなり文章に当てはめて考えると、どれも正解に見えて答えが決まらなくなります。本文読解で話題整理をしておけば、挿入文に使われている文言から該当箇所を絞りやすくできます。また、挿入すべき文に接続語や指示語が入っていれば、前文とのつながりに関する大きなヒントになります。

去年度は出題されていませんが、文の並び替えの問題も、脱文挿入と同じ考え方です。並び替えの対象になっている文だけでなく、本文の空欄箇所の前後の文にも注目しましょう。